

赤十字 NEWS

<http://www.jrc.or.jp>



北海道胆振東部地震

苦難に立ち向かう
人々を支えていく

CONTENTS

FEATURE_2・3

北海道地震
赤十字の活動

TOPICS_4

赤十字の、ひと

TOPICS_5

「骨髄バンク」推進月間

ドキドキ体験!
みんなのボランティア
「防災ボランティア」(岡山県)

AREA NEWS_6・7

福島/大阪/群馬・京都・静岡/
東京/熊本/全国

Column

[健康豆知識]
乾燥による肌の痒み

WORLD NEWS_8

避難民キャンプで新生児を救う
ビタミン支援(バングラデシュ)

1枚の写真から(ミャンマー)



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室
〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
TEL: 03-3438-1311
一部 20円
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

写真:読売新聞/アフロ

9月6日午前3時7分。真夜中に震度7の巨大地震が北海道を襲いました。停電、断水、電話も不通。夜明け前の暗闇の中で人々の不安も頂点に。日赤は、甚大な被害に対応すべく、発災直後から救護活動を開始。毛布・緊急セット・安眠セットなどの救援物資を配布し、特に避難者の多い厚真町・安平町・むかわ町などの地域で、救護班が医療救護活動を展開しました。

人間を救うのは、人間だ。



特集1

北海道地震

平成30年北海道胆振東部地震

赤十字の活動

北海道を襲った最大震度7の地震は、土砂災害などで41人に上る犠牲者を出すなど大きな被害をもたらしました。日本赤十字社は災害対策本部からの要請を受け、43の救護班や12班の日赤災害医療コーディネーターチーム、10班のDMAT(災害派遣医療チーム)などを派遣し、対応に当たりました。*

*9月20日時点



9月6日に発生した北海道胆振東部地震により、北海道庁の発表では、16,649人の方が避難所に身を寄せました。北海道内の全ての火力発電所が停止して全域で停電が起きたほか、各地で土砂災害のために家屋が崩れ、道路が封鎖されるなど、甚大な被害が出ました。

日赤は地震発生直後から被災地へ救護班を派遣、特に被害の大きい厚真町を中心に、安平町、むかわ町内の避難所で巡回診療を実施したほか、約600人の方が避難されていた厚真町総合福祉



センターには、24時間体制の救護所を設置しました。なお日赤支部は毛布・緊急セット・安眠セットなどの救援物資を避難所などで配布しました。北海道内に10カ所ある赤十字病院も、停電直後は自家発電で対応しましたが、全ての病院で送電が復旧し、約3日後に通常診療を再開できました。

今回、深夜に起きた地震で暗闇の中を必死で逃げ、余震がある中停電が続くことによって不安を感じた方も多く、日赤は SNS などを通じて、



暗い時こそ声掛けが大事というメッセージや、狭い場所で身体を自由に動かせない状態のまま長時間過ごすことでエコノミークラス症候群になるおそれについても発信しています。

日本国内では記録的な猛暑や豪雨、台風などの自然災害が続いています。日赤ではこうした災害に備え、日頃から医師・看護師などからなる救護班の派遣、救護所の設置、被災現場や避難所での診療、こころのケア活動などの訓練を全国の支部・病院で行っています。



地震発生直後、北海道と東北6県から救護班が派遣され、救護活動にあたった



避難所の運営スタッフに状況を確認する旭川赤十字病院の救護班



日赤本社は協定を結ぶ海上保安庁の航空機で、日赤医療センターの医師を含む初動班を北海道へ派遣した



救護所 | 医療が必要な人のために

避難所生活を送る大垣尚生(なお)さんが、7歳の息子さん(なつ)を日赤の救護所へ連れてきました。避難所でいろいろ触ったからか目が痒くなってしまったそう。「救護所で診てもらい、薬をもらって助かります」と大垣さん。自宅ではタンクや水槽が倒れ、役場勤めのご主人も被災直後から災害対応のため会えておらず、不安な日々を過ごしていました。

巡回診療で被災者に寄り添う | こころのケア

救護班が巡回診療していた際、幼い子どもたち3人(長女6歳、長男5歳、次男2歳)と避難所生活を送る大倉麻由美さんが、苦しい胸の内を語られました。「自宅に片付けに戻りたいし職場にも手伝いに行きたいが、子どもたちもいるし、はしゃいで周りに迷惑をかけるのではと不安もある」。救護班はその言葉にじっくりと耳を傾け、気持ちが落ち着くまで寄り添い続けました。



支援物資 | 防災ボランティアが活躍



水上安全赤十字奉仕団の委員長を務める岩瀬俊雄さんは、今回、赤十字防災ボランティアとして活躍。安平町役場や追分公民館など4カ所に救援物資を運び、「今回のように自然災害の対応は初めてで、資材の搬送は後方支援ではあるが、避難所の係の方からお礼を言われると、極めて重要な役割を担っているのだと気が引き締まります」と力強く語りました。

台風被害の教訓を生かし透析患者を受け入れる

地震発生後、停電のため自家発電への自動切り替えが行われた清水赤十字病院。透析は通常通り実施し、停電で診療ができなくなった帯広市内のクリニックより計15人の透析患者を受け入れ臨時的に夜間透析を実施しました。清水赤十字病院では、2年前の台風10号被害を教訓として

透析資材のストックを2週間分に増やしていたため、他院からの患者を受け入れることができました。

送電の復旧まで通常診療に近い形を継続できたことは、赤十字病院として災害への備えを最重要事項ととらえ、教訓が生かされた成果です。



写真は伊達赤十字病院。地震発生直後の午前3時20分、自宅にいた職員も参集し、非常電源の下、災害対策本部の活動を開始

清水赤十字病院

段ボールベッドで避難所の環境改善

毎年「厳冬期訓練」など災害訓練に熱心に取り組んでいる日赤北海道看護大学。同大学独自の取り組みとして、大学内の倉庫に備蓄していた段ボールベッド400人

分を厚真町地区を中心とした避難所へ設置しました。ベッドの導入で、床のホコリを吸いこまず、高齢者も起き上がりやすくなり、寒さをしのぐ効果が期待されます。

被災者の声



小納谷 守さん(69歳)

「地震が起こってすぐ、3時間歩いて避難所に来ました。硬い床の上では寝づらく眠りも浅かったけれど、段ボールベッドは意外に寝心地良くて、これで眠れそうです。うちは米農家で、あと数日で収穫予定だった稲のことが心配だけど、とりあえず寝る場所が少し良くなっただけでも、ほっとしました」

日赤北海道看護大学

動画で見る赤十字の活動

北海道地震の被災地での活動を紹介します



www.jrc.or.jp/movie/

「平成30年北海道胆振東部地震災害」義援金、受け付け中

平成30年9月6日に発生した北海道胆振地方中東部を震源とする最大震度7の地震により、北海道に大きな被害が出ました。この災害で被災された方々を支援するため、下記のとおり義援金を受け付けております。皆さまの温かいご支援をよろしくお願いいたします。

■義援金名称：平成30年北海道胆振東部地震災害義援金 ■受付期間：平成31年3月31日(日)まで
■協力方法：

[1] 郵便振替によるご協力(ゆうちょ銀行・郵便局)
口座記号番号 00130-1-673591
口座加入者名 日赤平成30年北海道胆振東部地震災害義援金

※ゆうちょ銀行の振込用紙の半券を受領証の代わりとして、寄附金控除の申請にお使いいただけます
※窓口でのお振込みの場合は、振込手数料が免除されます
(ATMによる通常振り込みおよびゆうちょダイレクトをご利用の場合は、所定の振込手数料がかかります)

[2] 銀行振り込みによるご協力
①三井住友銀行 ずらん支店 普通 2787533
②三菱UFJ銀行 やまびこ支店 普通 2105541
③みずほ銀行 クヌギ支店 普通 0620413

※口座名義はいずれも「日本赤十字社(ニホンセキジユウジヤ)」
※銀行振込の際の利用明細書を受領証の代わりとして、寄附金控除の申請にお使いいただけます
※ご利用の金融機関によっては、振込手数料が別途かかる場合があります

日本赤十字社 平成30年北海道胆振東部地震災害 義援金

検索

<http://www.jrc.or.jp/contribute/help/308/>

義援金は
全額
被災された方へ



赤十字
の、ひと

no.001 静岡赤十字病院 救命救急センター長 中田託郎

老々介護、家出、…地域の問題に 穏やかに立ち向かう「救命救急医」

鳴り響くサイレン。救急車から担架に乗せられ運ばれて来た重傷患者。慌ただしく救命処置を行う医師、看護師…。「救命救急」と聞くと、こんなシーンを思い浮かべるのではないだろうか。

確かにそれもよくある情景ですが、それよりも僕の職場は「**地域で問題を抱えている人が、最初に運ばれてくる場所**」という表現がふさわしい場所です。

例えばこんなことがありました。高齢者の2人暮らしで、子どもがおらず、親類が遠方に暮らしている家庭。奥さんが認知症になり、高齢の旦那さんが介護をしていた。その旦那さんが倒れ、救急車で運ばれて来たとき、重度の認知症の奥さんも救急車に乗ってやって来た。旦那さんはそのまま入院するが、さあ奥さんはどうしよう、となる。またある時は、こんなケースも。深夜に道端に倒れているところを発見された高齢の女性。食事をとっておらず、衰弱しているが『家に帰りたくない』と。家族と暮らしていても、何らかの事情で家に居づらく、あてもなく外をさまよっていた。これら2つのケースは市役所や地域のケースワーカーと連携して対応しました。時には行政や警察とも密接な連携をとって、地域の問題に医療として関わっていく。それが救命救急の現場です。そして僕は、救命救急室に運ばれてきた人の、**体だけでなく、できればその人の心や、その人を取り巻く問題さえも、来る前よりも良い状態にして帰りたい**、という信念で臨んでいます。

東日本大震災では日赤救護班の第一班として被災地に入りました。鮮明に覚えているのが、腹痛で救護所に連れてこられた小



救命救急チームと治療方針について話し合う中田医師(写真中央)

学校低学年の男の子。腹痛の原因はいろいろありますが、その子の家族は行方不明とのことで、精神的ストレスが原因ということも考えられました。救命救急では、普段から外科内科を問わず、運ばれてきた方の症状全般を診察します。しかし、専門医の診察が必要と判断した場合は引き継ぎをして担当から離れます。

僕が詰めている救護所には、引き継ぎができる小児科の専門医がいませんでした。この男の子の苦しみを、早く、ちゃんと取り除いてあげたいと思うけれど、小児科専門医ではない僕は自分の診察に「迷い」が生じます。2011年当時、僕の娘も、目の前の男の子と同じくらいの年齢でした。苦しんでいる男の子と自分の娘が重なります。逡巡した結果、「やるしかない。僕がこの子を救うんだ」そう腹をくくって診察し、薬を処方しました。

僕はこの時、『**患者にとっては専門など関係ない**。医者として、あらゆる状況に対応できる能力を身に付けておかねばダメだ』と思い知りました。災害医療の現場で、医者として**本来あるべき姿**に気づかされたのです。

中田託郎ドクターはどんな人？



笠原直人 医師

静岡赤十字病院
救命救急センター

部下

他県から静岡に移ってきた時、救命救急のある病院は他にもありましたが中田先生との面接で日赤に決めました。チーム中田の目標は「良妻賢母」。他科の医師にとって良妻で、研修医には賢母、中田先生らしいバランス感覚に優れた救命救急医の在り方。ここには医師としてたくさんの学びがあります。



池田朋美 看護師

静岡赤十字病院
救命救急センター

同僚

戦場のような救命救急現場。でも中田先生はいつも穏やか。患者さんや患者さんの家族も、中田先生と話すうちに自然と緊迫感が和らぎます。救急科なのに居心地が良いなんて矛盾しているようですが、仲間同士の信頼関係の良さや、穏やかな空気は、中田先生の人が影響していると思いますね。



鈴木嵩弘 医師

浜松赤十字病院
外科

教え子

中田先生が、たった一人から始めた救命救急センターも今や8人。優秀な人材を引きつける病院を“マグネットホスピタル”と呼ぶそうです。僕が静岡日赤で研修医をしていた時、救急車に同乗した消防署の救急隊員は「救急科の先生としてまず思い浮かぶのが中田先生」と。不思議と人を引きつける先生の人柄の良さを実感しました。



2011年、東日本大震災の救護所で診察を行う中田医師(写真右)



赤十字の活動は「ひと」がつくる。赤十字らしい「ひと」、赤十字活動を頑張る「ひと」を、「赤十字の、ひと」として紹介します。(不定期掲載)

10月は「骨髄バンク」ドナー登録の推進月間

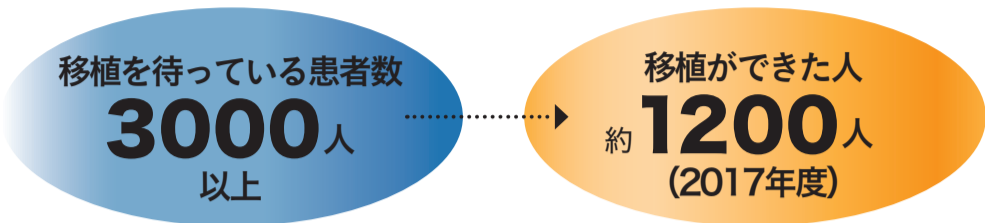
あなたの「登録」が誰かの希望に

「生きたいと願う人がいる。」——この瞬間にも、移植を待っている人がいます。

今年度ACジャパンの骨髄バンク支援キャンペーンCMに出演するタレントの中川翔子さんは、9歳の時にお父様を白血病で亡くされました。中川さんは現在32歳、お父様が他界された年齢です。「骨髄バンクの一番下の登録年齢は18歳ですよね？親子だから型が合っていたかもしれないのに…」と振り返る中川さん。今回の出演が誰かの幸せや命につながるのなら、このCMは「父と私のいろんな意味での集大成」とメッセージを発信しています。

毎年、約1万人の方が、血液難病*1を発症しています。1人でも多くの骨髄移植の機会が確保されるよう、より多くの提供者(ドナー)を必要としています。日赤は、国から造血幹細胞提供支援機関の指定*2を受けて、献血ルームでドナー登録を受け付けている他、ドナー登録者に必要な検査や個人情報の管理、マッチング検索など、さまざまな取り組みで骨髄バンク事業を支えています。

*1 「血液のがん」と呼ばれる白血病、悪性リンパ腫や、再生不良性貧血など
*2 平成26年施行の「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」による



ドナー登録について、詳しくはこちらをご覧ください

骨髄バンク

<https://www.jmdp-donor-special.jp/>

ドキドキ体験! みんなのボランティア vol.5

防災ボランティア

at 倉敷市災害ボランティアセンター*(岡山県)



赤十字救急法などの指導員資格を持つ安全奉仕団の団員が発前にレクチャー

出発

熱中症・感染症対策をレクチャー。このレクチャーが始まってから、多い日で十数人が熱中症で緊急搬送されていたのがほぼゼロに!



出発するボランティアに熱中症対策で塩あめやウチワを配布。



お迎え 疲れて帰ってきたボランティアに氷のうを配ります。

気持ちはひとつ! さまざまな形で復興の力に。

西日本豪雨災害で被害の大きかった岡山県の、倉敷市災害ボランティアセンターで体験してきました。ここでは、赤十字の安全奉仕団が「防災ボランティア」として活躍。全国から集まったボランティアが被災地へ出発する前にレクチャーし、熱中症対策でウチワや塩あめを配ったり、水の補給をしたり。活動を終えたボランティアのお迎えでは、感謝の言葉を掛けながら氷のうを渡し、靴や器具の洗浄を手伝いました。

ボランティアセンターは復興を支えるボランティアの熱意と善意であふれ、胸が熱くなる思いでした。

* ボランティアセンターは社会福祉協議会が運営。赤十字奉仕団は運営のサポートをしました

お住まいの地域の窓口はウェブサイトでもご案内

jrc.or.jp/volunteer/search/



※ボランティアの活動内容や受け入れ状況は地域によって異なります。詳細は日赤支部にお問い合わせください。



こんにちは。40代の主婦、あかいろん 赤井十子です!子育てがいち段落してできた時間を活用して、困っている人や地域の役に立つ方法を探しています。

WORLD NEWS

避難民キャンプで新生児を救う
「ビタミン支援」(バングラデシュ)



バングラデシュ

*国際赤十字では、政治的・民族的背景および避難されている方々の多様性に配慮し、「ロヒンギヤ」という表現をしないこととしています



仮設診療所でビタミンKの投与を受けた後、柔和になった母親たちの表情から「ありがとう」の気持ちを感じられた、と佐藤助産師

新たな生命、そして母となる女性を守りたい 日赤が率先して「ビタミン支援」を実施

避難民キャンプで、生まれてくる赤ちゃんが直面する命の危機。
小さな命を明日につなげるため、日赤は新生児に不足するビタミンK投与を支援しています。

避難民キャンプには6万人の妊婦が… 苦しい状況の中に誕生する新生児

日赤では、子どもたちの健やかな成長を支えるため、「ビタミン支援」という取り組みを実施しています。

2017年8月、ミャンマー・ラカイン州で起きた衝突をきっかけに、多くの避難民が隣国バングラデシュへなだれ込みました。バングラデシュ南部避難民*の数は70万人を超え、その中にはおよそ6万人の妊婦(国連発表)がいるともいわれています。十分な医療設備や良好な衛生状態を確保できず、生まれてくる赤ちゃんたちが命の危機にさらされます。

その1つが「ビタミンK欠乏症」です。ビタミンKが不足すると、消化管や頭蓋内で出血する恐れがあります。状況次第では発育に影響が出るケースや、後に障害が残る場合も。

新生児の腸内はビタミンKが生成されないだけでなく、母乳中のビタミンKも少ないため、生後1週間から1カ月後は特に注意が必要です。

生まれてきた赤ちゃんを守るために 仮設診療所でビタミンKを投与

こうした状況を受けて、日赤は今年7月から仮設診療所でビタミンKを投与する「ビタミン支援」を開始。新生児に投与することで頭蓋内出血などを抑制する効果が期待できます。

現地でビタミンKの投与に携わっている佐藤友香理助産師(名古屋第二赤十字病院)によると、バングラデシュの基準に合わせて「計3回の投与を目指しているが、2回目以降の投与を受けに来る方はとても少ない」という問題点も。また、「現地の習慣で産後1週間は外出禁止である中でビタミンKの大切さを伝え

るのに苦労していて、ビタミンK投与の啓発活動を行う必要がある」と語ります。赤ちゃんの健やかな成長が避難民キャンプで暮らす人々の希望となることを信じて、日赤は「ビタミン支援」の活動を続けています。



ビタミンKの投与を受けた新生児の母親からは「自分の周りにも知らせていきたい」という声も



イラスト付きの三角巾を用いてけがの手当てを練習するミャンマーの青少年赤十字メンバー



命を守る赤十字の知識と技術

ミャンマーの青少年赤十字メンバーが使っているミャンマー赤十字社の救急法セットの三角巾は、通常イメージする真っ白のものではなく、イラスト付き。応急手当ての際に役立つ三角巾の使い方が分かりやすく描かれています。

現地では災害の多発や交通事故の増加といった問題を抱えていますが、救急医療システムの整備は十分ではありません。そのため、地域住民が自分たちで応急手当てを行うことが、命を守るうえで重要です。

赤十字が普及に努める応急手当ての知識と技術、そして苦しんでいる人を救いたいという思いは、全世界で共通しています。

語り©日本赤十字社 救護・福祉部 渡部心

